

オオバ(春植え)の養分吸収特性

表1 調査ほ場の土壌化学性

調査 ほ場		pH	EC (dS/m)	無機態N (mg/100g)	交換性塩基 (mg/100g)			塩基飽和度 (%)	CEC (me/100g)	有効態P ₂ O ₅ (mg/100g)
					K ₂ O	CaO	MgO			
現地A	定植時	6.7	1.21	34	168	659	110	99	32.7	556
	終了時	6.2	0.51	10	118	621	83	90	32.1	530
現地B	定植時	6.5	0.73	24	113	661	87	108	28.0	365
	終了時	5.9	0.65	15	124	634	76	95	30.4	398

注) pH、ECは生土：水を1:2で測定。

表2 高知県施肥基準および調査ほ場の施肥管理

	基肥			開始(月/日)	追肥			合計		
	N	P ₂ O ₅	K ₂ O		N	P ₂ O ₅	K ₂ O	N	P ₂ O ₅	K ₂ O
高知県施肥基準	30	30	30	—	21	30	10	50	30	40
現地A	25.7	15.7	15.7	4/28	11.3	4.5	1.8	37.0	20.2	17.5
現地B	30.7	20.7	18.6	4/19	5.9	2.4	0.6	36.6	23.1	19.2

注) [定植] 現地A；2017年2月24日 現地B；3月8日

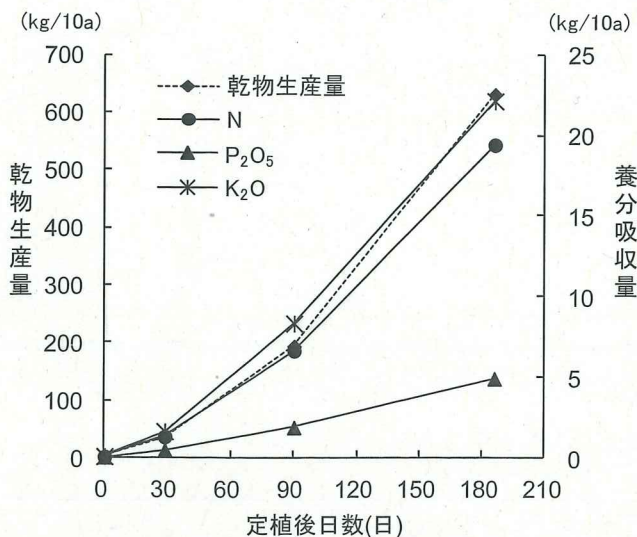


図1 時期別乾物生産量および3要素吸収量の推移
注) いずれの項目も2ほ場の平均値を示す。



写真 ほ場の様子(定植後180日頃)

高知県では作物別施肥基準を設定し、土壌診断に基づいた施肥の適正化を進めています。オオバは高知県の主要品目の一つですが、養分吸収量については未調査であったことから、現地土壌の実態と時期別養分吸収量を明らかにするため、南国市の2ほ場で調査しました。ここでは、春植え作型の調査結果について報告します。

いずれのほ場も交換性塩基が多い傾向にあり、有効態P₂O₅も蓄積していました(表1)。一方、乾物生産量、N、P₂O₅およびK₂O吸収量は定植後30日以降、急激に増加する傾

向が認められました(図1)。

また、Nは基肥と追肥を合わせると1作に37kg/10a程度施用されており、現行の施肥基準よりも施用量は控えられていました(表2)。しかし、N吸収量は19kg/10a程度であったことから、施用量をさらに低減できる可能性が示され、施肥基準の見直しが必要であることが明らかとなりました(図1)。

来年度は、今回得られた養分吸収特性の結果を基に所内で効率的な施肥体系について検討する予定です。

(土壌肥料担当 十川由起 088-863-4915)